留学生交流支援制度（ｼｮｰﾄｽﾃｲ）採択プログラム

東日本大震災からの復興と、八戸高専の果たす役割
-マレーシア高専予備教育センターの学生訪問-

八戸工業高等専門学校教授　太田 徹
OHTA Tohru

１　日本語が話せる外国人の若者たち

1981年マレーシアの首相であるマハティールは、東方政策（the Look East Policy）をかかげ、労働倫理・経済哲学・成功の経験などを日本・韓国に学び、国の発展を目指す決意を示した。日本の高等専門学校はこれに協力し、毎年100人近い留学生を受け入れてきた。

2007年、八戸高専は学生支援の予算希望が通った。そのなかの一部として留学生のネットワークづくりがかかげられ、同僚数名と私がメンバーとなった。退職して非常勤の仕事をしていたＴ先生が、留学生担当だったころの人脈と資料を生かして留学生の故郷をたどり､八戸高専留学生の名前と住所との対応名簿をつくった｡八戸高専は、卒業生の名簿と同じように留学生の名簿を手にしたわけである。この名簿を使った最初の仕事が、マレーシアの留学生OBに直接面談し、彼らをネットワークでつなげることだった。

2009年１月の初旬、Ｔ先生と私はマレーシアに着いた。まず留学生が２年間暮らした高専予備教育センター[1]に行った。センターはマレーシア工科大にあり、たまたまその日は国立高専機構本部の第３学年編入学試験（外国人対象）があった。私は、高専に入る前に数学や物理などを勉強するとは聞いていたが、実際どんなところかはよく知らなかった。センターのなかでは、大勢の日本人とマレーシア人のスタッフが仕事をし、200人近いマレーシア人学生が日本語を操っていた。その日は、そのうちの２年生100人ほどが受験中で、建物は緊張感が張り詰めていた。

その晩、高専予備教育センターの日本人コーディネーター家族とともに夕食を取った。今度の春に日本に帰り日本の大学に行くという息子さんと、その世話のため日本に帰るという奥さんがいた。やはり日本に帰るのかと思いながら、真冬の八戸から来た私は南国の冷めない熱気に新鮮さを感じていた。と同時に、200人もの外国人が日本語を学び日本に行きたいのにどうして八戸高専はそれに関われないのか、そして八戸高専の学生を連れてここに来てみたい、マレーシアから日本に派遣できないか、と思った。相互の交流を口にすると､「それができればいいけれど・・・」という反応だった。日本からマレーシアに来ることは可能であっても、逆は物価水準の違いから不可能だったのである。

日本に帰ってからマレーシア行きの学生希望をとった。私は、八戸高専の国際交流

[1] 高専予備教育センターは、マレーシア政府が選抜した学生に対し、日本の高専３年次に編入学するまでの２年間、日本語や教科に関する予備教育を行っている。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

を進めるクラブの副顧問をしている。前の春、Ａ先生がクラブ員４名を連れてアメリカ旅行を実施している。これは２回目の海外渡航である。7名の部員が応募して、2009年の夏休みに、Ａ先生とＫ先生を加え、旅行費用１人12万円で７泊８日の旅に出た。

現地では高専予備教育センターには２泊３日の滞在予定だった。日本人学生は、一人一人がまわりをマレーシア人学生に取り囲まれ、矢継ぎ早の日本語での質問に答えるので手一杯だった。Ａ先生もその仲間に加わっていた。Ｋ先生はそれを写真に写していた。そうした光景は夜中の11時すぎまでつづいた。つぎの夜も同じような眺めが見られた。もし英語を話すところだったらはじめて日本を離れてこのように歓迎をうけるだろうか、高専から来て日本語を話す学生だからこのような大歓迎をうけるのだ、うらやましいことだ、日本に行ったマレーシア人はこのような歓迎をうけるのだろうか、そもそもマレーシアから日本にいけるだろうか、私は学生時代に初めての渡航で初めての留学だった自分の経験と重ねあわせていた。

２　資格問題

2010年夏、私の同僚のＡ先生が高専改革経費を使ってマレーシアと交流事業をすることが認められ、学生の海外渡航にも「奨学金」というかたちで旅費が支給されることになった。また同じころ私も、大学や高専に募集がかかっていた日本学生支援機構の留学生交流支援制度（ショートステイ、ショートビジット）（以下、SSSV[2]）に申請し、マレーシアから日本を訪問する10名の学生に対する月額８万円の奨学金も認められた。高等教育をとりまく状況は、外国の人と伍してやっていく力をつけるには奨学金をだそう、というように大きく変わろうとしていた。

このころまでには、留学生がそれぞれの国において大切に扱われる人材であるとともに、故郷にかえれば国の言葉を自由に使えることが我々にも自覚されていた。また、留学生は国ごとに文化の違いがあり、それを色濃く残していることもわかった。留学生は使える、というのが私の正直な感想であった。

2011年11月の初めに八戸で、マレーシアの人たちとの国際シンポジウムが開かれた。高専予備教育センターをはじめとする留学を目的とする部門は、所属大学をマラ工科大学に移した。やってきたのは、各国留学コースをまとめる学長をはじめとするマレーシアの方々である。マラ工科大の総長は、「都合がつけば来るかもしれない」と我々をあわてさせた。そのほか高専機構本部、全国の高専教員、そして八戸高専教職員や学生たちも参加した。

さて、八戸高専を会場として会が開かれた。その合間の休憩時間のことである。Ａ先生から、「もうじきマレーシアから学生を10名呼び寄せて、一週間ほど、高専と八戸地域を見てもらおうと思っているんです。」と話がおよんだとき、学外の方から、「マレーシアは大学に入るまでの修業年限が１年短いので高専予備教育センター１年生で大丈夫ですか。念のためSSSVを実施している日本学生支援機構に確認をしてもらった

[2] 日本学生支援機構留学生交流支援制度（ショートステイ、ショートビジット）において、「SS」は学生の受入れ、「SV」は学生の派遣、「SSSV」は学生の受入れ・派遣の両方を意味する。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

ほうがよいと思います。」というアドバイスをもらった。

国が学生の海外派遣にお金をだすようになったのは最近のことである。どんな学生に金を出すべきかゆれていた。日本学生支援機構からは、SSSVの支給対象は高等教育機関に在籍する学生であるため、資格要件を満たしているか確認してほしいという説明があった。マレーシア高専予備教育センターと私は資料を収集し、日本学生支援機構に対して説明を行った。結論が出るまで時間がかかったが、最終的には、資格要件を満たしているとの判断をいただき、無事、学生を受入れることができた。

３　初来日

Ｔ先生が成田空港まで迎えにいった。飛行機は早朝着で、八戸と千葉だから、一泊付きである。マレーシアから引率の先生が付くからわざわざとも思ったが、寒さのことを考えると、そもそも常夏のマレーシアのどこに毛糸のセーターなど防寒用のものを売っている場所があろうかと、不安になったのである。事実、クラブのメンバーをたよりにかき集めたアノラック（登山やスキーなどで着る、フードつきの防寒、防風用の上着）はすべて、マレーシア人の言い方にしたがえば「冷蔵庫に入った寒さ」から彼らを守った。八戸は12月中旬で寒さがいよいよ本格化しようとしていた。

この時分、私は病に倒れて半年ほど休職し職場に復帰してから数ヶ月で、軽度の失語症に言葉が思うように出なくなる症状で苦しんでいた。日本語も書くのならいいけれども、ひとまとまりのことを話すとなると、はじめは話せるつもりであっても話しはじめると何を話したかったのかが見えなくなり頭が混乱してしまう。授業では、予習でなんども話を繰り返し練習したあと、授業で話すようにしていた。それでも書くことと話すことの距離があり、すっかり話が嫌になってしまっていた。まして英語は経験が浅い。英語はこのくらいなら話せるはずなのにという感覚だけが生きていて、じつのところまったく話せなくなっていた。同じクラブのＡ先生は英語が得意であったが、海外出張中であった。日本語を習いはじめて半年の人たちに私の日本語が通じるだろうかと不安があった。

東日本大震災で被災した八戸地域企業を訪問する計画は、企業の見学予約は１ヶ月以上前でなければならないため、予約はすべてキャンセルとなった。市役所に防災を語ってもらおうにも、いまは市議会で大忙しだった。しかし、捨てる神あれば拾う神あり、である。東北電力八戸火力発電所が見学をあらたに許可してくれた。ここは海岸に近く押し寄せた水のため一昼夜送電が中止されたところである。六ヶ所村の原燃PRセンターも許可をくれた。六ヶ所村は、核燃料処理施設、原子力発電所、貯蓄用石油タンク、風力発電が同居するエネルギーの見本市みたいなところであり、この時期は心理的抵抗があった。が、背に腹はかえられない。被災地野田村でボランティア活動を続ける同僚に頼み、野田村の町役場の人から話も聞けることになった。

私の構想では、はじめに被災地を訪れ津波のようすを聞く、ホームステイをして休み、そのあと高専の授業を見るというものだった。だが実際は、初日に被災企業を見て､続けてなか２日高専の授業を見て､そして週末ホームステイは２泊３日に長くし、

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

月曜に野田村へ出かけその夕方東京への列車に乗るというものになった。つまり、ぐちゃぐちゃになったのである。しかし、やはりマレーシアの学生が来てよかった。

男７名、女３名、引率の先生１名が来日メンバーだった。でも先生はホテルに泊まり、ジャパン・レイルロード・パスを使い東日本をどこでも自由に歩けるため、もっぱら他県の高専生に会いに行くのが日程のようだった。学生は寮に宿泊した。男子は、フランス人との短期交流用の宿舎が15室あった。フランス人はこのとき居なかった。女子は女子棟の空いた１部屋と留学生の女子の１部屋を使った。日本語は、話をゆっくりしゃべり難しい漢字熟語はなるべく避けると相互に会話できた。留学生は、ときおり込み入ったことがあると英語を使う。聞き取りなら私も病気以前と変わらなかった。

マレーシアのひとりの女の子が、着いてすぐに靴を買いたいと言った。見るとかかとが壊れていた。ついでに外の学生をみると、どの学生も夏のスニーカーである。この年は12月というのに例年になく一面の雪景色であった。体の寒さはアノラックで防げたものの足までは考えがおよばなかった。Ｔ先生のアイデアで、りんご農家が雪の中での枝きりに足が冷えるとき使うという保温付きの中敷を買った。

企業見学、高専の授業見学はだいたい予定どおりおわった。東北電力は、東日本大震災で総発電量1600万kWの40%を失ったことを知り、停電の一昼夜の会社内のあわただしさが聞こえてくるようだった。原燃 PR センターは、吹雪のなかでひっそりと我々をまっていた。高専の授業は前夜に見学が決まったにもかかわらずにこやかに協力してくれた。ホームステイでは、近隣を見て過ごした人、凍てつく十和田湖に出かけた人、100km以上はなれた雪の津軽の家に宿泊した人、とさまざまだった。

帰る前の日の日曜の夕方、学生から評価をしてもらった。留学意図・学習の中身についての知識・国際理解について留学前後を比べた。文章でも書いてもらったが、ほかに５段階評価で点数もつけてもらった。留学前は平均３ぐらいで、後は4.5ほどだった。日本への事前の評価の厳しさと、実際に日本を見たときにひらける展望の明るさを表していると思った。

４　２度目の来日

１年のうちに、Ａ先生は日本中をかけまわって国際交流関係の仕事をするようになった。Ｔ先生は津軽で定年退職後のりんご農家業に精を出している。私は、少しずつ病気以前の状態に戻りつつあった。去年はマレーシア人学生に10月の予定が12月になり寒い思いをさせた、今年は秋の紅葉の十和田湖を見せ１年で青森が美しいときを見せたいと思った。

今年は男４人、女６人、引率教員１名という組み合わせだった。学生は男女１名ずつ２年生であと８名は１年生だった。引率の先生はホテルをとり、学生は寮と合宿所だった。先生は、去年と同じように他県の高専生に会いに行くかと思ったら学生たちと一緒にいた。学生は、朝の８時半にどうせ遅れてくるだろうと高を括っていたら５分前には集合した。行動も、お互いに助け合ってチームとして活動していることがは

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

っきりわかった。掃除も完璧だった。昨年は、良くも悪くも私の知っているマレーシアの人たちだった。約30分の時間のずれを覚悟して日程をくまなければならなかった。ふしぎに思っていたら、寮のマレーシア人の先輩の助言によるものだった。私はマレーシア人を見損なっていた。彼らはチームを組んで柔軟に対応できるのだ。

被災地を訪れるのも少し工夫した。町を訪れるだけではなく、それを取り囲む美しい海岸線を見るようにしたのである。三陸海岸は国立公園であり、北山崎は海岸の風景として日本交通公社から日本唯一特Ａの認定を受けたところである。しかし交通が不便なためなかなか行く機会がない。そこで南の田野畑の海岸から北の方角へ向かい、最大の景勝地である北山崎へと続く道筋をたどり、その小さな入り江がいかに津波で破壊され尽されいまだに復旧の端緒にあるかを見るとともに、その一方で北山崎・黒崎がどんなに美しく勇壮かつ自若としているかを目にするようにした。そしてその後で野田村へ進み、その復興規模の大きさをわかるようにした。

授業の見方も工夫した。授業は長く見ていなくていい、雰囲気がわかればよい、ただそのわかったものをプレゼンテーションできるようにその時間のうちに書きとめなさい、とした。そして授業見学３日目には５年生の学生たちに英語でプレゼンテーションをすることにした。そうすることでマレーシア人の負担を減らすとともに、記憶にまだ新しいものをとらえることができるようにした。

５　今後の課題

２年は、人の生活を変えるのには十分な長さである。マレーシア人学生は日本に来て研修するとき自らのありようを変えた。日本人スタッフは、Ａ先生やＴ先生や私が力をあわせるよりは、それぞれが自分の持ち味をだすことに重点をおくようになった。

SSSVの平成24年度の募集があり、23年度とテーマを少し変えた。地域を見るときは、大震災を感じるよりは自然も含めたこの地域の有様をみるように変え、企業訪問も新しい工夫を見るようにする。高専見学は、授業を見ることから、部活動・学生会活動・日常的な生活のすべてを見るように変える。これはいままでのやり方を変えるのではなく、ちょっとした工夫で見方を深める小さなワザが分かってきたからだ。小さな工夫の積み重ね、それが同じ時間でも中身を大きく変えていくのである。

25年度のプログラム[3]の採用はこの時点ではまだ分からない。ここで書いた「今後の課題」ももしかしたら意味がないかもしれない。しかし２年のなかで、それならばこうするさ、といった余裕が生まれたのは事実である。

[3] 支援対象期間が３か月未満の「留学生交流支援制度（ショートステイ、ショートビジット）」は平成24年度をもって廃止となったが、平成24年度まで３か月以上１年以内としていた「留学生交流支援制度（短期受入れ、短期派遣）」の支援対象期間が、平成25年度募集より８日以上１年以内に変更になったため、平成25年度は「留学生交流支援制度（短期受入れ）」に申請している。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.